

氏 名	さいとう まこと 齋 藤 眞
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 121 号
学位授与の日付	平 成 18 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	箱庭療法における関係性についての臨床心理学的研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 岡 田 康 伸	助教授 桑 原 知 子	助教授 皆 藤 章
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は心理療法の一技法である箱庭療法に関する研究テーマのなかで、心理治療者と来談者との関係性に焦点づけて研究されたものである。本文は6章と終章よりなり、3つの事例研究と数量的、基礎的な研究の2面を含んだ構成である。

第1章は「はじめに」と題されている。ここでは、箱庭療法とは何かやその歴史や箱庭療法における「心理治療者側からの心使いの差し出し方」や「心理治療者がその世界（作品）へ没入する仕方」の視点などが強調された。

第2章は「箱庭の系列的理解」と題されている。ここでは、立会人の異同を手がかりとして、心理療法の専門家が箱庭作品を系列的に理解していくときの特徴が検討された。同じ制作者（男子大学生20名）による2回の箱庭作品が同一の制作とわかるかどうかについて、専門家と非専門家とにマッチング実験が施行された。立会人が同一の組10名と異なる組10名の2回の作品が同一人の制作か否かを判定させた。これらの作品をマッチングする被験者は専門家群31名（男性13名、女性18名）と非専門家群33名（男性14名、女性19名）であった。各作品がどのような印象を与えるかについてはSD法（Semantic Differential, 意味微分法）によって把握された。

この調査により、同じ人が見守っていることがその作品の理解や制作者の理解などに何らかの影響を及ぼしていることが明らかになった。特に、専門家が箱庭の作品を理解していく特徴として作品を全体的に把握しようとすることやその連続的展開の可能性に注目することや制作者の砂への取り組みに着目することなどがわかった。

第3章は「箱庭〈世界〉の体験を共有する過程の理論的説明」と題されている。ここでは理論的な視点の整理がなされた。「深い転移」の中味を少しでも明らかにしようとして、立会人と制作者とにはすでに布置があることや分析心理学の概念を援用しながら、「体験の共有」が生じるところに、立会人と制作者は投げ入れられると考える。そして、この「共に居る場」での繋がりをたぐり寄せ、吟味し、練り上げていくことが必要と強調した。

第4章は「箱庭〈風景〉を生きること―事例からの検討―」と題されている。ここでは、男子大学生20歳の3年間にわたって制作された6個の作品について「来談者と心理治療者とがどのように気分づけられて、繋がっていったか」を明らかにすることが試みられた。また、この6個の作品の印象の類似性を第2章で使用したSD法で意味づけた。身体感覚の実在感をもって「作品」に入るとき、心理治療者にはいろいろな体感と思いが去来する。これらを手がかりにすることで、来談者と心理治療者とが繋がり、「共に居る」治療関係が露わになる。作品の中に心理治療者が身体感覚をともなって没入すると、作品の「向こう側」を感じ、作品の哀れさや無力感が迫ってきて、心理治療者は箱庭の向こう側に祈らずにいられなくなると考察された。心理治療者が来談者と共に「向こう側からの視座」を共有する過程が生じてくる。この過程を吟味することで、作品の展開と治療関係との関連が明らかになる可能性が示唆された。

また、付論として、大学生20名（男性5名、女性15名）が5回制作した計100個の作品について調査1と調査2の2つの調査がなされた。調査1は非臨床群の評定者128名（男性1名、女性127名）が100作品をSD法に評定した。調査2では臨床群の評定者13名（男性5名、女性8名）がSD法に評定した。因子分析などにより、調査1と調査2の特徴や2つの調査の比較などが試みられた。

第5章は「〈箱庭を聴くこと〉とサトル・ボディ体験」と題されている。ここでは、場面緘黙症の小1男子の約23回の遊戯療法の事例を提示した。遊戯療法の体験をシュワルツ・サラント（Schwarz — Salant N.）のサトル・ボディ（見えない微細な身体）で考察した。さらに、この体験は来談者と心理治療者とが共に居るところを改めて照らし出すものであり、第4章で述べられた「向こう側からの視座」となると考察された。

第6章は「箱庭療法の背景思想をめぐって—〈見えない微細な身体〉を手がかりとして—」と題されている。ここでは、身体性と「向こう側」を問うために、西洋のキリスト教のミニチュアで作られるキリストの降誕場面を立体的に作るクリスマス・クリップスがレビューされた。また、東洋の箱庭の源流とされている盆景・盆山などもレビューされた。これらは「彼岸（向こう側）からの視座」を得ることが重視されていると主張した。「向こう側」の感覚を得るためには、ある体験の平面と別の体験の平面との「間」を移ろう「私の身体」を生きる必要があると明らかにした。

終章は「私たちの居るところからの祈りを見立てへと練り上げること」と題されている。ここでは、事例3として、21歳の対人関係の悩みを主訴とした女性の面接を示した。あらゆる身体感覚を具えた実在感をもって箱庭作品を生きようとするとき、作品はその「向こう側」との関係のなかで位置づけられてこそ実在性をもつ。心理治療者が来談者と共にその時々「向こう側」からの視座となっていく。これらが箱庭療法での心理治療関係を含んだ見立てに重要な展望をもたらすと述べられた。

論文審査の結果の要旨

本論文はスイスのカルフ（Kalf D. M.）によって創始され、河合隼雄によって、日本に導入された、心理療法の一技法である箱庭療法において、「作品（世界とよばれることもあり、本論文では世界が使われている）が作られるとき、治療関係がどのように関わっているか」について研究されたものである。すなわち、箱庭療法の研究テーマのなかで、心理治療者（見守っている人）とクライエント（制作者）との関係性に焦点づけた論文である。

調査による統計的な側面と3つの事例を示した事例研究の2つの側面より研究を試みており、行き届いたものになっていると評価された。

箱庭療法の理論的な視点を絞り込み、歴史的な背景も西洋（クリスマス・クリップ）と東洋（盆石、盆景など）の両面よりレビューするなど試みられており、配慮が行き届いていると評価された。また、単に、これらを箱庭療法の歴史として捉えるだけでなく、身体性と「向こう側」とを繋ぐものとして、レビューし、新しい見方を示したことも評価された。

箱庭療法は全身を使って、全感覚を使って制作されると主張されてきている。これらを理論的、実践的に説明しようとして、サトル・ボディと身体性と「向こう側」という3つの鍵概念を使用する。サトル・ボディとはシュワルツ・サラントによると、イメージの身体性を治療関係のなかで共有する体験を説明するための言葉であり、要約的に示すと、次のように言う。「治療者と来談者との間の空間にスクリーンのようなものを想像してもらい作業と、そのときに、治療者に去来する想念や身体的感覚をそこでの作業に組み入れていくことで、両者に共有されて見えるビジョンが布置されてくる。両者がこのビジョンを注視しつつ、その場にいる自分の中にうごめく情念や身体感覚を話し合っていくことで、そのビジョンが身体的と言えるほどの実在性を持った体験として深められていく。しかし、あたかも砂を握るように、次の瞬間には手ごたえだけが残って見えなくなってしまう。」

さらに、「向こう側」とは明確に定義されているわけではないが、「死」の世界やこの現実の世界を超えたものなどを想定していると思われる。たとえば、「作品を見ていて、向こう側が見えてくる可能性」とか「作品を向こう側から見ていくことの必要性」などと表現される。「向こう側」にもいろいろなレベルがありそうであり、層的に考えられそうである。著者もうひとつははっきりと定義づけていないことがわかりにくくしているのであろうと批判された。「向こう側」と言う以上は境があるのだろうか。向こうはわからないのだが、関係性は繋がっていることになるのであろう、などと話し合われた。箱庭の作品はいろいろな視点から考えられることが大切であるから、向こう側の視点は新しい視点を示しており、興味深いと評価された。

サトル・ボディと身体性とはどう違うか、どこが同じところかなども問題とされた。要するに、これらの3つの定義や違いなどがもうすこし明確にできれば、もっとよいものになったであろうと惜しまれた。

「関係性」というテーマを表題につけた以上はもっと「関係性」に絞ったほうがよかったのではないかと批判され、著者の考える関係性について検討された。また、関係性は「繋がる」だけでなく、逆に「切れるや別れるなど」も関係性のひとつであり、この点での関係性についてどう考えるかが問われた。また、「関係が切れている」、「関係が繋がっている」というだけでは表層的であり、もう少し関係性の層を考え、「関係が切れているようで、深いところでは、繋がっている」や「別れても繋がっている」などの場合もあるのではないかなどと話し合われた。

全体に細やかな、暖かい論文であったが、21歳女性の事例3は否定的なものが全体に流れており、そこからの視点をも示すことができ、「調査者は切れた世界の例があるとよいと考えていた」ことからみると、この事例を含めたことで、評価できるとされた。関係性はあらゆるものが繋がっているという考えもあり、こう考えると、「向こう側」との関係もできやすくなるのではないかなどと話し合われた。

水平性と垂直性の用語が使われているが、これと向こう側との関係について話し合われた。水平性は向こう側と関係が深いであろう。また、少し視点をかえて、これらと因果律と共時性との関係も考えられないかなどと話し合われた。

能動的想像はサトル・ボディと深く関係がありそうだし、これからの箱庭療法の研究もこれらの点を重視したものになるかも。また、「向こう側」からの研究も考えられるだろうかなどと将来の研究の話しも出た。いろいろな批判もあったが、本論文をよりよくするための指摘であった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成18年3月22日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。